漢詩鑑賞　令和六年五月　　　　　　　　　　　　　　玉井幸久

　　夏日

　中庭日午橘花開　　　　き

　蜂蝶何知故故來　　　にかりて　としてる

　一陣南薫生殿角　　の　にじ

　亂飄香雪點蒼苔　　をしてにず

【通釈】

　起句　心地よいま昼時、中庭に橘の花が咲いた。

　承句　すると、どんなにして知るのか蜂や蝶が次ぎ次ぎとやって来る。

　転句　ひとしきりの穏やかな南風が、寺院の屋根の一角から吹き下ろすと、

　結句　香り高い雪のようなまっ白い花びらが乱れ飛んで、庭の青あおとした苔の上

　　　　　に点々と散らばってゆく。

【語釈】

　中庭…なかにわ。　　　　日午…まひる。日中。

　橘…漢名の橘は狭義ではみかんの仲間のぽんかんを意味する。我が国では日本原

　　　　産のたちばなに橘をあてる。いずれも花は香りが高い。

　何…なに。どんな。　　　　故故…しばしば。たびたび。

　一陣…風や雨などのひとしきり。

　南薫…①古代の聖天子が天下が治まり民が富むことを願って作ったとする詩

　　　　　「南風」をいう。〔孔子家語、辯樂解〕昔者、舜弾五絃琴、造南風之詩、其詩曰、

　　　　　南風之薫兮、可以解吾民之慍〈いかり〉。南風之時兮、可以阜〈ゆたかにす〉吾民之

　　　　　財兮……。

②転じて　南風。初夏の風。温和で生物を育てる風をいう。

　殿角…寺院の屋根のかど。　　　　亂飄…みだれひるがえす。

　香雪…香りのある雪。白い花の形容。　　　　蒼苔…青あおとした苔。

【押韻】

　平声　灰韻。開、來、苔、

【解説】

　僧　善住（？―？）は元の僧。字は無住。別号は雲屋。呉郡の報恩字に住み詩を善

　くした。

　この詩は初夏の寺院の中庭の、のどかで平和な風景を詠んだ気品ある一品として

　鑑賞に堪える佳作であるるが、当時の政治情勢に鑑みるると、詩は単なる情景描

　写ではないようにみえる。

　「南薫」は聖天子舜の故事を含み、｢香雪｣は善政を「靑苔」は人民を思わしめ、善政

　を渇望する民の思いを、収奪を専らにする政権に伝えんとする切実な諷刺の詩と

　しても鑑賞することが出来る逸品です。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　以上

　　　　　　　https://youtu.be/90y\_lzbuaow